

## 宮沢賢治と中尊寺 「中尊寺〔二〕」(文語詩未定稿)を中心に

2025(令和7)年9月21日

信時 哲郎 甲南女子大学教授

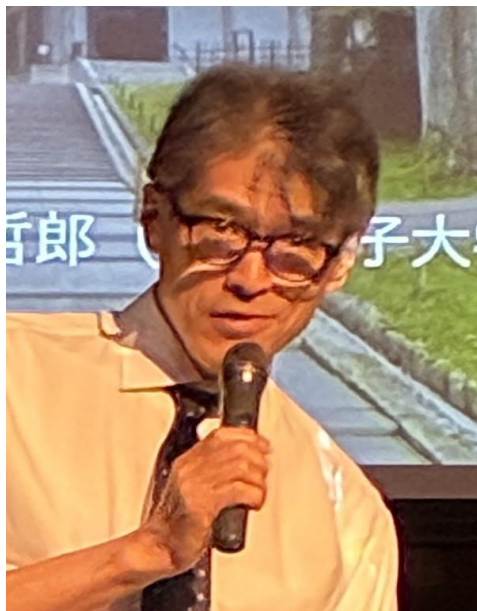
### <はじめに>

ご紹介いただきました信時と申します。どうぞよろしくお願いたします。

比叡山に来たのは、思い起こすと中学校の修学旅行以来で、予想してはいたのですが、本当に騒音がないですね。今日は琵琶湖の方から上がってきたのですが「これは悟りが開けそうだな」と思いました。と言って、今日はそんなありがたい話をするわけではないのですが、何かこの比叡山に因んだようなお話を、と思ひまして…でも宮沢賢治さんが比叡山に来たこと、そのことに関してはたくさんの研究が既にあるんで、なかなか新しい視点でお話するのもむずかしそうだな、ということで、「宮沢賢治と中尊寺」というお話をすることにしました。

何で中尊寺を取り上げたのかと言いますと、ご紹介にもありましたように、私は、今、文語詩を研究しております、その中に

「中尊寺〔一〕・〔二〕」というのがあるからなんです。で、中尊寺というのは、ご存知の方も多いだろうとは思いますが、天台宗ですね。中尊寺を開いた方が、この比叡山で修行された円仁(慈覚大師)さんだということもあって、縁が深いから。まあ、こじつけ的ではありますが、せつかくここ比叡山での講演ですので、少しだけでも関わりのある内容と思って、中尊寺を取り上げてお話をしたいと思ひました。この厳かな雰囲気の中でこんな話なのか、と思われるかもしれませんが、どうぞお気軽に、楽しんで聞いていただければな、と思っております。



### <文語詩は「死の直前に書き上げた」>

宮沢賢治は短歌の制作を中学時代から始めております。今で言ったら高校生ぐらいでしょうか。その後、大学にあたります盛岡高等農林学校、現在の岩手大学農学部ですね。そこに進学しまして、この頃から短編的な、短歌では収まらないものも書き始めます。それがやがて童話になって、また、詩も書き始めます。『心象スケッチ 春と修羅』。賢治はこの本のことを詩集ではなくて心象スケッチなのだと言っておりますが、今で言うと、やっぱり詩集というべきものでしょうけど、そんな本を刊行し、同じ年に『注文の多い料理店』という童話集も刊行しています。この辺のことは皆さん先刻ご存知で、既にいろいろ読んでおられるだろうと思ひます。

それからずっと後、賢治は**昭和8年(1933年)9月21日**、今から92年前に亡くなりましたが、9月21日に亡くなるその直前の**昭和8年8月15日**に、賢治は「文語詩稿 五十篇」、これをまとめて日付を書きます。賢治は作品について、とにかく推敲に次ぐ推敲をしており、どんどんどんどん「こんなのはまだまだ」と思ひ、「きっとまたどんどん良くするんだ、推敲するんだ」なんて考えていたようです。そんな賢治が「これは定稿です」と宣言しているのが「文語詩稿 五十篇」なのですが、それから1週間ぐらい経った**昭和8年**

8月22日には、今度は「文語詩稿 一百篇」の日付を書いて、やはり定稿ですとして書き終え、そうして9月21日に亡くなっているんです。

恐らく結核だと思いますけれども、8月22日であれば、そろそろ自分にも最期が近いことは意識していたと思うんですね。そういう時に書いたのが**文語詩稿**なんです。今回扱うのは**未定稿**でして、定稿にはまだならないけども、もうちょっと手を入れたら定稿になったかもしれない、といったものです。もう全くの失敗作もあれば、「五十篇」「一百篇」の次、もしかしたらその後になって「三十篇」なのか「四十篇」なのかかわからないですけど、とにかく、そういう詩集を作って、組み入れたかもしれないです。ただ、残念ながら、そこまでは命が持たなかった。結局、文語詩の定稿集二つと、百篇ほどの未定稿を残して賢治は生涯を終えました。

さて、今いらっしゃる方でも「宮沢賢治の文語詩？ なんだそれは？」とか「そんなもの聞いたことないわ」と思われる方もおられるんじゃないかと思うのですが、それもそのはずで、ほとんど注目されてないんですね、実は。宮沢賢治の研究書はたくさん出てますけど、文語詩に関しては全く言及しない方も多くいらっしゃいます。いや、いいんです、全く言及しなくても。あるいは言及してないわけではないけれど、「晩年は文語詩に没頭した」。ほんとに、その一行で終わってしまうような本もたくさんあって、もう気持ちいいくらいに無視されてる、というような扱いです。「いいんですよ」と、開き直って言いましたけども、本当にいいのかな、とも思うんです。

確かに大正時代には高村光太郎ですとか萩原朔太郎ですとかが、口語を重視した詩を書いて成功しました。古くさい文語じゃなくて口語で書くだよ、音数律からも自由なんだよ、と。そういう風潮があって、宮沢賢治も二人の影響を受けて『春と修羅』という、すごく自由な口語を使った詩を書いたのです。

そして『春と修羅』については、同時代でも、知ってる人は知っているというくらいに、「あー、岩手に宮沢さんとかいう人がいましたね」と言われ始めるくらいにはなっていたようです。それで現在の研究者も、賢治はすごいすごいというのでたくさん読まれ、研究されてもきているのですが、ただ文語詩については、最後の最後になって「**文語詩を書いてしまった**」、つまり、せつかく「新幹線通ったよ」という時になって「これからSLを通します」みたいな、「インターネットができて、AIも使える世になった」という時代になって「さあ、これから手書きで文字を書きますよ」みたいな、そういう感じなものですから、無視、というか、何も語らない、語りたくないという状況になっているのかと思います。なので賢治の文語詩は「**病床での手遊び**」なんて書いた人もいました。

賢治が文語詩を書き始めたのは昭和4、5年ぐらいからか、と言われてるんですが、その時代の詩人たちも、なんで今さら文語詩に退化するのか、という感じで、真面目に受け取らなかったようです。賢治の「心象スケッチ」というのは、いろんなところに行って、小岩井農場とか岩手山とかに行って、もう歩きながら書いたりする。夜になっても書く。眠りそうになったら眠りそうになった意識、今眠りそうだっていうことを書くみたいな… もういろんなところに行って、いろんな状況を文字にしようと思って書いているんですね。で、「こんな語彙、こんな書き方した人はいない」などと、その時代にもそうだし、現在の研究者たちも、すごい人だな、なんて思われて、そういうことについては評価されているのですが、でも、晩年になると、今まで書いてきた口語詩を文語詩に圧縮して、中学時代、高等農林時代にあったことなんかを綴っていったりする。「なんで口語詩であそこまで書いた人が、文語詩なんていう古くさいものにしがみついているの？」という感じで、誰も見ないし読まない… だから、賢治は病気になって外にも行けなくなったものだから、ただ暇つぶしの「手遊び」としてやっていたのだろう、という以上に評価されてこなかったわけです。

ただ、妹さんに向かって、賢治は「**なつても（何もかも）駄目でも、これがあるもや**」と言ったということも知られています。

宮沢賢治の一生は、農学校を出ても農学の専門家になるわけでもなく、先生をやってもすぐやめちゃう。農民になったと思ったらやっぱりやめちゃう。それから肥料を売るセールスマン兼技師になるのですが、やっぱりこれも、病気のためでもあります、すぐにやめちゃう。結局、何にもなっていない。たしかに詩や童話も書いたけれど原稿料をもらったのは1回だけ。なにもかも中途半端です。今でこそ延暦寺で60回も法要していただくような、そんな有名人になっているわけですが、在世中の賢治を、社会的にだけ見ていけば、本当にダメな人でしかありません。賢治も、それは自覚していたと思うので、こういう言葉が出たんでしょう。でも、その賢治が「**なにもかもダメだったけど、これがあるやん**」と、なので「**俺の人生そう捨てたもんじゃない**」と、そう思えたのが文語詩なんだということなんです。そうなる、これ、やっぱり真面目に考えておかないといけないんじゃないかと私は思うんです。



講演風景(1) 延暦寺会館2階 講堂

晩年に草野心平という詩人に賢治が原稿を頼まれてですね、草野に何か原稿を送ったらしいのです。どうもそれが文語詩だったようなのですが、そしたら草野心平が「なんだこれは」と。「俺はこんな古臭いものなんか載せる気はないよ」というようなことを書いてきたらしいんです。それで賢治はどう返事したかという、**「春と修羅」などの故意に生活を没したるもの、貴下に同感を得しこと兼て之を疑問とす**と。書簡の下書しか残ってないですけども、そんなことを書き送ったらしい。つまり**非常な自信と、使命感**を持ちながら文語詩を作っていたんですね。

そんなわけなので、私は「これは研究しなきゃいけない」と思って、『宮沢賢治「文語詩稿 五十篇」評釈』と『宮沢賢治「文語詩稿 一百篇」評釈』という本も出版しました。本当に研究している人がいないんで…私ね、賢治の文語詩に関しては研究者の五本の指に入ってると思ってます。というのは研究者が三人ぐらいしかいないからなんですけど。うん、そりゃ入るわ、と。ですからもしご興味があれば、是非文語詩を研究してほしいと思うんです。文語詩というのはわからないですよ。パッと見て、あんまり面白いと思えるようなものでもないです、正直に言って。でも、これほど賢治が力を込めて、自信をもって書いたというのだから、たしかにわからないし、面白いとも思えないかもしれないけれど、それでも、なんとかわかるための道をつけないとダメな気がすると思って手をつけてみたんです。いろいろ間違ってますし、「間違ってますよ」と言われることも実際少なくないのですが、きちんと間違っ、それを誰かに間違いだよと指摘してもらって、ああ、そうか、となれば、そこで文語詩の解釈は一步だけ進む。童話や詩の研究だって、最初は手当たり次第で、いろいろ間違えていたと思うのですが、だんだん研究も重なっていろいろなことが分かってきたわけですよ。なので先頭になって堂々と間違っ、いつかそれを直してもらって、そうして一步一步と分かって行けばいい

のではないかと、思っているんです。

### <文語詩を書いた理由（口語重視は早すぎた）>

では、文語詩はどんなものかっていうと、お手元のプリントにあると思いますが、例えばですね、「中尊寺〔二〕」。これを見れば、なぜ文語詩が無視されるかわかる気がするんですね。これちょっと昔っぽい作品ですし、つまらないんですよ。いや、つまらないとか、わからない。言葉自体は、さほど難しくないのですが、どういう意図で書かれて、どこに向かって進もうとしているのか、そういうことが全くわからないんです。ちょっと読んでみます。

#### 中尊寺〔二〕（未定稿）

白きそらいと近くして  
みねの方鐘さらに鳴り  
青葉もて埋もる堂の  
ひそけくも暮れにまちかし

僧ひとり縁にうちゐて  
ふくれたるうなじめぐらし  
義経の彩ある像を  
ゆびさしてそらごとを云ふ

未定稿だから、もしかしたら、この後、推敲されて、ものすごいものになったかもしれないです。しかし、何ですか？「そらごと」って。せっかく中尊寺で詠んでいるというのに金色堂も出てこないし、せめて金が出てくる話でもすればいいのに、なんにも出てこない… どう扱っていいのかわかりません。

もちろんね、僕は昭和の生まれですので、文語詩といったものに慣れ親しんでいないということ、教養のなさといったこともあるんだと思うんです。ただ、申し訳ないけど「良い」とはなかなか言えないです。良いとは言えないし、わからない。しかし、こうした作品に何かを盛り込むことができた満足している宮沢賢治という人がいたのであれば、せめて、これは何を言おうとしたかぐらいは研究しなきゃいけないと思って、今、頑張っているところなんです。

これはですね、宮沢賢治が中学時代に平泉に修学旅行に行った時に書いたものを元にしていただとされています。

で、そもそも、なんで賢治が文語詩を書いたかというところ… ちょっと長くなるんですが、さっき賢治は『春と修羅』のような口語自由詩の作品について「生活を没した」と評しているのを紹介しましたが、仮説ですけど、やっぱり賢治としては口語自由詩っていうのは、まだ時代的に、ちょっと早すぎたんじゃないか。そういう反省があったんじゃないか、っていう風に私は思ってるんです。

これから口語の時代になる、自由詩の時代になる、それは多分、認識できていたと思います。ただ、やっぱり当時の人たちにとって、口語というのは、まさに「生活を没した」というか、まだまだ自分たちの生活には合っていない言葉だった。論理的に、流れとして口語で自由な詩の時代がくるというのはわかるけれど、やっぱ

り、それでは心がついていかなかったんじゃないかと思うんです。

賢治は「口語詩は絶対ダメだ」とか言ったわけじゃなくて、最晩年にも口語自由詩を推敲したり、発表したりもしてるんです。ただ、少なくとも今、自分が注力すべきことは口語じゃなくて**文語なんだ、定型なんだ**と… 岩手で日々の生活を真面目に過ごしている人を相手にするんじゃないくて、東京あたりのオシャレ詩人…たとえばカフェに行って、ワイングラスを傾け、タバコ吸って、「僕は詩人だよ、これからは自由詩だよ」みたいな、そういうことを言ってるようなオシャレ詩人たちを相手にするんなら、これからの詩である口語自由詩を作るのもいいかもしれないです。で、実際、賢治も若い時代には光太郎とか朔太郎の詩などを読みながら、頑張って勉強して一生懸命書いたんでしょう。でも、岩手においては口語自由詩なんて「**何ですか、それ?**」みたいに受けいれてもらえない。論理的には、新しい時代の新しい言葉になると、みんな、頭では思ってたかもしれない。例えば現代における英語みたいな感じ… 英語はもう世界共通語なんだから、チマチマとローカルな日本語なんかにかかわらず、全世界に耳を傾け、全世界に向かって情報発信していかなくちゃいけないんだ、とか、よく言われますよね。トヨタとかね、三菱だとか、そういう大企業なんかだったらいいのかもしれませんが、家族内の会話とかで、アトムハッピーとか、ビコーズなんかかって言っても、なんか違いますよね。アトムハッピーって言ったところで、私なんかハッピー感を伝えられた気がしない。まあ、そんな感じで、方向性は、まあわかるよ、わかるけどもじっくりこない。「俺、嬉しい」「めっちゃ嬉しい」と言った方が「ああ、嬉しいんだろうな」という気分が伝わるじゃないですか…

今となっては、「なんで口語よりも文語の方がじっくりするんだ?」と、おかしな話に思われるかもしれませんが、当時の日本人にとっては、やはり口語自由詩はピンとこない。文語詩の方がいいんじゃないか。そんな考えがあって、頑張って『春と修羅』を口語体で書いて、たしかに東京あたりの詩人には認められ始めていたかもしれないけど、花巻に戻ると「なんのことだかわがね」とか言われたんじゃないか。で、どうするかって言ったら、その当時の人たちに、花巻に限らず、日々の生活をきちんと送っているような人たちにわかってもらうためにも、「ああ、そうだね」と言ってもらうためにも文語詩を書いたんじゃないかと思うんです。

例えばさっき言った光太郎とか朔太郎とかも口語自由詩から文語詩に戻りますね。ずっと戻ったわけじゃないにしても、やっぱりちょっと行き過ぎたっていう自覚があったんじゃないか、という気がします。

何度も言う通り、賢治の文語詩は残念ながら、面白いとはなかなか言えない。私が『宮沢賢治「文語詩稿五十篇」評釈』を出して、今、何年ですか、もう15年ぐらいになりますかね。で、研究し始めてから20~30年ぐらいになってると思うんですけど、ようやく最近になって、「あれ? 文語詩研究ってけっこう面白いな」と、ようやく思えてきたんです。今日はもしできたら、講師が面白いと言っているんだから、じゃあ、文語詩を読み始めてみようかな、と思っただければ嬉しいです。

### <中尊寺への修学旅行 「そらごと」「偽ヲ云フ僧」「にせものの像」の謎>

「中尊寺」は、比叡山の高僧・円仁さんによって開かれたと言われている天台宗東北大本山の寺院です。奥州藤原氏の華やかな文化、金が取れたりもしましたし、アイヌ系だったという話もありますけれども、その華やかな文化の中心地が平泉でした。世界遺産にもなりましたね。

堂塔40、僧坊300といわれ、ものすごく広いところで、しかもたくさん施設があったと言われております。初代・藤原清衡によって、金色堂が上棟された。ですけども源頼朝が、泰衡という四代目を騙して殺してしまって、平泉の藤原氏は滅亡した。そこに逃げていた弟の義経も殺されてしまって、平泉の栄光の時代はな

くなる。が、頼朝は仏教を重んじていたために、中尊寺は庇護されたと言われております。

そんな平泉で、賢治が残した短歌2首があります。

**中尊寺／青葉に曇る夕暮れの／そらふるはして青き鐘鳴る。**

**桃青の／夏草の碑はみな月の／青き反射のなかにねむりき。**

「桃青」っていうのは松尾芭蕉のことです。賢治はこの2首を赤い枠で囲ってますが、これは文語詩にしたというサインでもあると言われてるんです。で、実際、「中尊寺〔二〕」に文語詩化してますね。後者は文語詩とは関係ないんですけど、前者は「中尊寺〔二〕」です。また、賢治は文語詩を書くときのためのメモ（「文語詩篇」ノート）にも「**中尊寺、 偽ヲ云フ僧 義経像 青キ鐘**」と書いてます。同じときの体験であるのは確かですが、義経像はともかく、「**偽ヲ云フ僧**」、これはわからない。歌には書いていないエピソードで、これを文語詩の方に「そらごとを云ふ」として使っているわけですけど、この「偽リヲ云フ僧」ってなんでしょう？ 次にそこを考えていきたいと思います。

ちょっと話が外れますけど、宮沢賢治の時代の修学旅行ってすごい、今考えるといい加減というか、ものすごいんですね。平泉駅。パワーポイントでは、この赤い丸がついてるところなんですけど、この後ですね「義経堂」に行ってるようです。去年、私、平泉に行ってきたんですけど、ここ、だいたい歩いて20分ぐらいかな。そこから先に中尊寺がある。ここも10分ぐらい？ で、その後、<sup>もつうじ</sup>毛越寺に行って、この碑を見てる。ですけども16時54分に平泉に到着し、多分、義経堂を回って中尊寺で鐘が鳴るんで、ここで18時。詳しくはわかりませんが、**阿部孝**という賢治の友達、その人が旅日記で、駆け足で帰路をステーションに急いだと書いてる。駆け足なんですね。バスなんてもちろんない。帰りは臨時列車に乗って23時25分に盛岡に着いた。当時3時間ぐらいかかったんで、20時ぐらいに平泉駅を出てるんだと思います。ものすごく強行な行程ですよ。しかも、その時になって突然、平泉に行くことに決まったらしいんです。

#### 中尊寺〔二〕 （下書稿（一）手入れ）

みねのかた

青き鐘なり

白きそらいとも近きに

この堂は青葉めぐらし

義経の経笈を守る

僧ひとり縁にうちみて

膨れたるうなじめぐらし

にせものの像を指し

さりげなくそらごと云えば

白きそらいよさびしき

これは下書き原稿に手入れをした段階のものです。で、こっちの方は「**にせものの像**」という、また、よくわからないものが混じってますね。「この堂は青葉めぐらし義経の経笈」、これは「けいきゅう」ですかね、い

ろんなものを義経が持っている。「僧ひとり縁にうちみて／膨れたるうなじめぐらし／にせものの像を指し／さりげなくそらごと云えば／白きそらいよよさびしき」。

「そらごと」というのはあまりいいことじゃないですよ。嘘ですから… 下書き稿を見ると、その嘘もそうだけど、「にせもの」という言葉も出てきてます。中尊寺の短歌だけを見れば、なんかこう、中学の修学旅行がバタバタする中でもそれなりにちょっと感動があったのかなって気がするんですけども、文語詩になると「偽リヲ云フ僧」だとか「にせものの像」だとか、あまりよろしくない言葉が連続で出てきたりしています。

「これは、何のこと？」というのもあるんですけども、より不思議感が強まるような気がしますね。なんで賢治はそんなことを書いたんだろうか？ 「ありがたいな」とか、「金色だったな」とか書けばいいのに、「そらごと」「にせもの」なんて、なんでそんなことを書くんでしょうか。しかも、修学旅行から帰ってきてすぐならともかく、もう晩年になってるのにこんなこと書いてるんですよ？ で、私もいろいろ考えてみました。

### <賢治さんの仕掛け 作品や字句をセットに（サブリミナル効果）>

ちょっと話がずれるんですけど「屈折率」という詩があります。『春と修羅』第一集に出てくる、こんなやつですね。

#### 屈折率

七つ森のこっちのひとつが  
水の中よりもつと明るく  
そしてたいへん巨きいのに  
わたくしはでこぼこ凍ったみちをふみ  
向ふの縮れた亜鉛の雲へ  
陰気な郵便脚夫のやうに  
（またアラツディン、洋燈とり）  
急がなければならぬのか

宮沢賢治は生前『春と修羅』『注文の多い料理店』の2冊しか本を出していないんです。で、「どんぐりと山猫」、これは『注文の多い料理店』の方にでていますが、天沢退二郎という詩人で研究者の方がおられたのですが、この2つを比べて、似てるねって言うんです。何が似ているか、お分かりになりますか？

「屈折率」というのは『春と修羅』の冒頭に挙がっている詩なんですよ。最初の作品です。それから「どんぐりと山猫」。これも『注文の多い料理店』の一番最初に載っている。『春と修羅』は、書いた順番にずっと並んでいますから、「屈折率」が一番最初に書いたものになりますね。で、ここで賢治は何て書いているかという、おそらく自分のことを言ってるんでしょうけども、「陰気な郵便脚夫のやうに急がなければならぬのか」と。俺は郵便配達だよ、郵便を届けるんだよ、と。七つ森がね、屈折率によって明るいけど、俺はこの凸凹の中を郵便配達しなきゃいけないのか、みたいな。

「どんぐりと山猫」は、これは賢治自身とは言えないでしょうけれど、おかしなハガキが一郎のところに届

くんです。9月19日、大体今日あたりの感じでしょうか、おかしなハガキが届く。手紙というものは、誰かとのコミュニケーションをとるものですが、**賢治は詩集と童話集のどちらも冒頭に、コミュニケーションのきっかけになるようなモチーフを登場させた作品を持ってきている**。これは仕掛けだったろう、という風に、天沢さんは言うんですね。僕もそうかなと思います。

宮沢賢治という人はまだまだ理解できません。僕も何十年も研究していますが、こういう風に色んなところに仕掛けを作って、郵便だよ、とか。郵便によってみんなからメッセージを聞きたい、そして届けたい、そういうふうなものを冒頭に持ってきたりするんです。

で、賢治はいろんな仕掛けを作ったと思うんですけど、どうもこういう**セットで何かすることが多いんじゃないか**と思うんです。これもセットですけれども「**冬と銀河ステーション**」、それから「**岩手軽便鉄道の一ヶ月**」。この「岩手軽便鉄道の一ヶ月」は、下書稿のタイトルは「**銀河鉄道の一ヶ月**」だったんですね。「冬と銀河ステーション」は『春と修羅』の第一集。「岩手軽便鉄道の一ヶ月」は『春と修羅』の第二集。第二集っていうのは、結局、出版されなかったのですが、それはともかく、どこが似てるかわかりますよね。『**春と修羅**』**第一集の最後の作品が「冬と銀河ステーション」で、「春と修羅」の第二集の最後にと目されたものが、この「岩手軽便鉄道の一ヶ月」だったんです**。やっぱりセットなんです。

なんでこんなことをやるのかわかりません。ただ、**セットにする**っていうことを賢治はよくします。よくしますっていうか、しているんじゃないかと囁かれていて、僕ももっといろんなところに、賢治はセット化という仕掛けをやってるんじゃないかなと思うんですよね。なんでやるのかっていうと、例えば、サブリミナル効果（潜在意識に刺激を与えることによって、生体に何らかの影響を与えること）かなと思うんです。

オウム真理教が話題になったときに、テレビを見ていると、一瞬だけ麻原彰晃の顔がピッと出てくる。そうすると、テレビ見ている人が彰晃に親しみが湧いてくる。そのためにやってるんじゃないか、などと囁かれました。そういう研究は19世紀ぐらいという、かなり昔からあったみたいです。賢治はそれを知っていたかどうかわからないけども、なんかそんなようなものを狙っていたと思うんです。

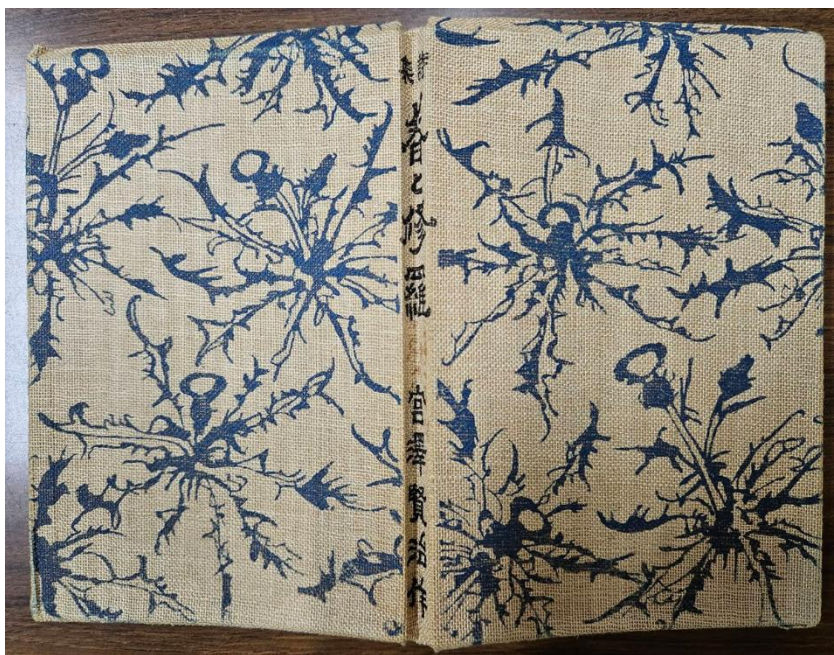
最近、似たような経験があって、私の息子が或る会社に内定もらったんです。それで「〇〇って会社、知ってる？」と聞かれて、「ああ、知ってる、知ってる」と言ったけれども、よく考えてみると、なんで知ってるのかわからない。でも、なんか聞いたことあるなあ、と思っていた或る日、テレビでプロ野球中継を見てたんですね。そしたら外野のフェンスにその会社の名前が書いてある！ こういうのがサブリミナル効果じゃないかな、と思いました。球場のフェンスっていうのは、ホームランが入るかどうかの境になるので、ここに書いてあると目にめっちゃめっちゃ入るんですね。だから、そういう時に刷り込まれたんじゃないかと思ったりします。賢治がそんなことをどれぐらい意識していたかわかりませんが…

### <「本歌取り」も装丁もサブリミナル?>

ただ、そのようなことは、詩人ということを考えればありうる。例えば「**本歌取り**」（古い和歌の一部を引用しながら新しい和歌を詠む技法）というのもサブリミナルっていうと、ちょっと的外れかも知れないですけど、昔から、そういう効果というのは考えられていたんですね。

例えば藤原定家が、「**来ぬ人を／まつほの浦の夕風に／焼くや藻塩の／身もこがれつつ**」と詠んで、定家自身が編んだとも言われる百人一首にも選ぶ、つまり自身の最高傑作だということじゃないかと思うんですが、それが本歌取りの代表的な例としてよく登場します。これは万葉集の「**淡路島／松帆の浦に朝風に／玉藻刈**

りつつ夕凧に／藻塩焼きつつ海  
 人をとめ」をパクるっていうか編  
 集するっていうか、そんなようなこ  
 とをした作品なわけですね。こう  
 いう風にしながら、定家は昔に言  
 われていたものをうまく自分の時  
 代風に取り入れ、そして普通だっ  
 たら31文字では言い切れない、い  
 ろんな雰囲気詠み込んでいっ  
 た。サブリミナルとは言えないか  
 もしれないけども、同時代の人た  
 ちが知ってる歌や伝説とか、そう  
 いう人々の記憶にあるものを引用  
 しながら、新しいものを作り、そ  
 の総体を伝えるようなものを作っ  
 ていったわけです。



『春と修羅・複製本』（信時哲郎先生所蔵）

あと『春と修羅』の装丁なんかもそうなんじゃないですか？ 宮沢賢治自身が作ったわけではなくて、頼んだみたいですけど、ちょっとザラザラした感じで、アザミの花でしょうか。持った感じは岩手の大地というか、自然を感じさせるような、そんな装丁になっています。やっぱり装丁にも当然こだわりますよね、詩人っていうのは。自分の詩がどういうところで、どういうメッセージを発しているか。自分の詩集に香りをつけた、なんていう詩人もいたりします。というか、それこそ平安の昔には、みんな紙に香りを焚き染めて歌を贈ったりしていたので、そうやって相乗的に雰囲気を立ち上げさせようとしたんでしょう。何かレモンのような匂いをつけるみたいことをしながら、まあサブリミナルといういろんな感覚を動員させながら、なんとか自己表現していたんじゃないかと思うんです。そりゃ宮沢賢治だって、いろんなことをやろうとしたでしょうし、そう考えてみるのが普通だと思います。

### <文語詩定稿（五十篇、一百篇）に同じタイトルの作品 セット化>

これも私、頑張って主張してるのに、あまり皆さんに賛成していただいていない説なんですけど、文語詩稿には「五十篇」と「一百篇」が定稿として残されたことは、先にもお話したとおりなんですけど、タイトルが同じものがペアになって収録されてるんです。

お手元の資料にあるんですが、「〔一〕」とか「〔二〕」とかいうのは、あれは編集者が仮につけたものですけど、先ほど、賢治は『春と修羅』の第一集と第二集、また、『春と修羅』と『注文の多い料理店』とが、それぞれセットのように、「対」になって編集されているということを言いました。同じように「五十篇」と「一百篇」も、やはりセットとして賢治は扱っていて、その例の一つが、この同タイトル作品なんじゃないか、なんて思ってるんです。

「五十篇」の中に「悍馬〔一〕」、悍馬というのは元気な馬という意味なんですけども、「一百篇」の方にも「悍馬〔二〕」を作っている。調べていくと、「悍馬〔一〕」の方は、最初のタイトルは「牧人」、つまり牧場に

いる人。当時は乳牛でも肉牛でもなく、馬牧場が多かったわけですが、ともあれ、それがだんだん内容も変わって行って、そして「悍馬〔一〕」になった。自分が実体験として何を見たか・聞いたかというのは、文語詩を推敲している頃には、もう賢治の頭にほとんどないです。それよりも、内容的にも文体的にも洗練させて行って、そして「**これがあるもや**」という感じで、自信の持てるものを追い求めていった気がします。そして、「悍馬」のように、最初は違う時の体験をそれぞれ詠み込んでいた詩を洗練させていながら、同じタイトルの別作品、音楽における歌詞の一番と二番のような感じの「対」を作ろうとしているように思えるんです。郵便と郵便、銀河鉄道と銀河鉄道とセットにしたみたいに、「悍馬」をセットにすることによって「サブリミナル効果」というか、「本歌取り」というか、そういうふうなものを残したのじゃないかと思うんです。

**悍馬〔一〕 (五十篇)**

毛布の赤に頭を縛び、	陀羅尼をまがふことばもて、
罵りかはし牧人ら、	貴きアラヴの種馬の、
息あつくしていばゆるを、	まもりかこみてもろともに、
雪の火山の裾野原、	赭き柏を過ぎくれば、
山はいくたび雲滃の、	藍のなめくぢ角のべて、
<u>おとしけおとし</u> いよいよに	馬を血馬となしにけり。

**悍馬〔二〕 (一百篇)**

窮肥をはらひてその馬の、	まなこは変わる紅の竜、
けいけい碧きびいどろの、	天をあがきてとらんとす。
勲き菅藻の袍はねて、	<u>叩きそだたく</u> 封介に、
雲ののろしはとどろきて、	こぶしの花もけむるなり。

タイトルだけじゃなくて、例えば「悍馬〔一〕」に「**おとしけおとし**」、「悍馬〔二〕」に「**叩きそだたく**」とあるんですけど、文法的にも意味的にも「おとしけおとし」の「け」、「叩きそだたく」の「そ」、これが説明できない。これってなんだろうかと、いろいろ考えてみたんですけど、両方の詩篇を並べてみると、なんか元気づける、勢いづけるような、そのための文字、接頭辞／接尾辞のようなものとして、意識的にセットで添えられている感じがします。たまたま〔一〕と〔二〕ができた、というんじゃなくて、敢えて同じタイトルにして、同じような情緒や雰囲気を持たせて、なんとなく二つを連関させながら、複雑な味わいを出そうとしたんじゃないか、なんていう風に思うわけです。

**<「秘事念仏の大師匠」もセット化>**

「**隠し念仏**」というのが岩手にあって、ちょっと江戸時代のキリシタンみたいな感じの宗教なんですけど、賢治はそれを秘事念仏と呼んで文語詩を作っています。

**〔秘事念仏の大師匠〕〔一〕 (五十篇)**

秘事念仏の大師匠、 元真斎は妻子して、  
北上岸にいそしみつ、 いまぞ昼餉をしたたむる。

卓のさまして緑なる、 小松と紅き萱の芽と、  
雪げの水にさからひて、 もこと睡たき南かぜ

むしろ帆張りて酒船の、 ふとあらはるるまみまじか、  
をのこは三たり舷に、 こちを見おろし見すくむる。

元真斎はやるせなみ、 眼をそらす川のはて、  
塩の高菜をひた噛めば、 妻子もこれにならふなり。

〔秘事念仏の大師匠〕〔二〕 (一百篇)

秘事念仏の大師匠、 元信斎は妻子もて、  
北上ぎしの南風、 けふぞ陸穂を播きつくる。

雲紫に日は熟れて、 青らみそめし野いばらや、  
川は川とてひたすらに、 八功德水ながしけり。

たまたまその子口あきて、 楊の梢に見とるれば、  
元信斎は齒軋りて、 石を発止と投げつくる。

蒼蠅ひかりめぐらし、 練肥を捧げてその妻は、  
ただ恩人ぞ導師ぞと、 おのが夫をば拝むなり。



講演風景(2) 延暦寺会館2階 講堂

「五十篇」の方の一連目の傍線部分は、「一百篇」の方の一連目の傍線部分と、同じような内容になっています。「げんしんさい」の漢字は、なぜか「五十篇」と「一百篇」で違うのですが、お互いがお互いを意識して作られていることは明らかですよね。もし「五十篇」を読んだ人が、「一百篇」を、この詩まで読み進めて来たら、「秘事念仏の大師匠、あれ？なんか聞いたことあるぞ」みたいな、そんな気がするんじゃないかと思うんです。だからどういふ結果になるのか、賢治が具体的に、どのような効果を期待していたのかまではわかりませんが、セット化することによって、前のものをより深く、そ

れこそ息子が内定をもらった某会社の名前について、私が、これまでの人生で縁もゆかりもなさそうな会社だったのに「あれ、なんか聞いたことあるな」と、そんな風に、「なんか聞いたことがあるな」というような感じを匂わせながら新しい情緒を盛り込もうとしたんじゃないかと思うんです。

「秘事念仏の大師匠〔一〕」の方は、最初は「憎むべき「隈」辨当を喰ふ」という、違う場所でできた違う人のことを書いていたのですが、推敲している間に、秘事念仏でまとめようということにしたらしく、この2つがセット化されてるんです。なんでそうしたのか、明確にはわかりません。賢治が、こんなような理論とかをメモとか、仲間宛の手紙とかに書いているといいんですけど、そういうのは全然ないんです。で、困ってしまうんですけど、セット化されたとしか考えられない作品群をみると、賢治ってというのは、こうやって、いろんな作戦をたてながら詩を書き、推敲し、詩集の編集なんかもしてたんじゃないか、と思ったりするんです。

### <もう一つのセット「車中」>

もう一例を言えば「車中」です。最初「車中〔二〕」の方は、タイトルがなかったんですけど、「車中〔一〕」の方にタイトルを付けたあとで、タイトルを付けて、だんだん内容も近づけて、最初は「車中〔二〕」の方にあった「開化郷土」という言葉、文明開化を体現するお金持ち、みたいな意味のようですけど、これを「車中〔一〕」の方に持って行ってしまったりします。二つの詩は、お互いがお互いを見合い、意識しながら賢治が作っていった。たまたまできたのではなくて、あえて似たように作ってるわけです。

#### 車中〔一〕 (五十篇)

夕陽の青き棒のなかにて、 開化郷土と見ゆるもの、  
葉巻のけむり蒼茫と、 森槐南を論じたり。

開花郷土と見ゆるもの、 いと清純とよみしける、  
寒天光のうら青に、 おもてをかくしひとはねむれり。

#### 車中〔二〕 (一百篇)

稜掘山の巖の稜、 一木を宙に旋るころ、  
まなじり深き伯樂は、 しんぶんをこそ広げたれ。

地平は雪と藍の松、 氷を着るは七時雨、  
ばらのむすめはくつろぎて、 けいとのまりをとりいでぬ。

文語詩は面白くない、面白くないと言いながら、でも、「五十篇」と「一百篇」の詩を、一つ一つ見ていくと、こういうことが見えてきて、ちょっと面白かったりするんです。

他にもタイトルは違うけれども、「血のいろにゆがめる月は」が「五十篇」に、「〔日本球根商会が〕」が「一百篇」に載ってるんですけど、なんか似てるんです。

〔血のいろにゆがめる月は〕 (五十篇)

血のいろにゆがめる月は、 今宵また桜をのぼり、  
患者たち廊のはづれに、 凶事の兆を云えり。

木がくれのあやなき闇を、 声細くいゆきかへりて、  
熱植ゑし黒き綿羊、 その姿いともあやしき。

月しろは鉛糖のごと、 柱列の廊をわたれば、  
コカインの白きかほりを、 いそがしくよぎる医師あり。

しかもあれ春のをとめら、 なべて且つ耐えほほえみて、  
水銀の目盛を数へ、 玲瓏の水を割きぬ。

〔日本球根商会在〕 (一百篇)

日本球根商会在、 よきものなりと販りこせば、  
いたつきびとは窓ごとに 春きたらばとねがひけり。

夜すがら温き春雨に、 風信子華の十六は、  
黒き葡萄と噴きいでて、 雫かがやきむらがりぬ。

さもまがつびのすがたして、 あまりにくらきいろなれば、  
朝焼けうつつすいちいちの、 窓はむなしくとざされつ。

七面鳥はさまよいて、 ゴブルゴブルとあげつらひ、  
小き看護は窓に来て、 あなやなにぞといふかりぬ。

まず、どちらも場所が病院で、似てますよね。でも、モデルになったのは別な病院で、また、取材した時期も全然違います。「五十篇」は岩手病院で、「一百篇」は花巻共立病院です。でも「五十篇」「一百篇」に収録された二つの作品を対比してみると「患者たち」と「いたつきびと」、「黒き綿羊」と「黒き葡萄」が似てますよね。「凶事の兆」と「まがつび（災厄をひきおこす神）のすがた」。「一百篇」に「七面鳥はさまよひて」とありますが、「五十篇」には七面鳥はいない。けれども、こっちは「黒き綿羊」がさまよっていたりしてるんで、やはり類似点と言うべきでしょう。「小き看護は窓に来て」については「五十篇」にも「春の乙女」が登場してますね。そして、なんとなく暗く、黒とか凶事などという語句も出てきて、そういう病院で「いたつきびと」がなんとか… みたいになっていて、なんか似ている。はっきりとは分からないし、明示もされてもない。ただ、病院、黒い綿羊、七面鳥… と、二つをペアにして異様な感じを醸し出そうとしていたことは確かであるように思えます。

さて、ここで中尊寺に戻ります。

### <中尊寺も無理やりセットに?>

#### 中尊寺 [一] (一百篇)

七重の舎利の小塔に  
蓋なすや緑の燐光  
大盗は銀のかたびら  
おろがむとまつ膝だてば  
赭のまなこただつぶらにて  
もろの肱映えかがやけり  
手触れ得ね舎利の宝塔  
大盗は礼して没ゆる

「中尊寺 [一]」は、当初はタイトルがなかったんです。内容もどんどん変わって行って、ギリギリになってタイトルを中尊寺に変えてるんです。もとは「**〔冬のスケッチ〕**」という、修学旅行とは全然関係ない時に書かれたものだとされているんですけど、こんな感じでした。

#### 中尊寺 [一] (下書稿 (一)・〔冬のスケッチ〕)

ぬすまんとして立ち膝し  
その膝、光かがやけり。

ぬすみ得ず 十字燐光  
やがていのりて消えにけり。

「**盗む**」なんていう言葉が出てますね。あまり良い言葉じゃないです。イメージが悪いです。中尊寺に行った大泥棒がいろんなものを盗む。ただそこで、仏舎利の入った宝塔があると、大泥棒なんだから盗めばいいのに、盗まない。ただ礼をして消え去った。大泥棒は悪者です。でも悪者なのに、あまりにもこの仏教的な美しさ、素晴らしさ、荘厳さに手を触れることができなかった。そしてただ礼をして消えていった、という。悪者なんだけど、ただ悪いと言うだけじゃすまない感じです。

「中尊寺 [一]」と「中尊寺 [二]」があるのですが、「中尊寺 [二]」の方は、修学旅行の時の短歌が発展したもので、実際の中尊寺での経験をベースにしています。で、「中尊寺 [一]」の方は、全然違う時に、賢治はそうそう中尊寺に行ってたわけでもないんで、別の場所でできたものなんでしょう。でも、無理やりに「中尊寺」というタイトルが与えられて、セット化しようとしたわけです。ただ、「中尊寺 [二]」は、定稿になって「五十篇」に収録されたというわけじゃないんで、セット化しようとしたけれど、「悍馬」とか「〔秘事念仏の大師匠〕」なんかとは違って、セット化しそこなった「対」の作品だ、ということになります。

では、「中尊寺 [一]」と「中尊寺 [二]」で、何が似てるかということ、取材場所は、ほんとは別々なんだろうけど、とにかく中尊寺という場所でできたもんだ、ということで統一されてます。そして「**大盗**」「**にせもの**」「**そらごと**」など 悪いイメージの言葉が盛り込まれていること。しかし、「中尊寺 [一]」で確認したよ

うに、悪いやつではあるけれど、単に悪人というだけでは済まないんだ、みたいなことがテーマになっているような気がします。つまり賢治は「**よくないイメージではあるけれど、だからといって単に悪だとしてしまうだけでは割り切れないこと**」というテーマでセットを作ろうとしたんじゃないかという風に思えるんです。

### <「にせものの像」の謎解き>

「中尊寺〔二〕」は未定稿に留まっています、定稿になることはできなかったんですけど、「**にせもの**」とか「**そらごと**」なんていうのをに入れて、セットにしようとしたんじゃないかということは言えそうですね。

で、この「**にせものの像**」なんですけど、なかなか何のことかわからないです。でも「にせものの像」を「にせものの絵」と言ってみたら「似せ絵」、つまり「肖像」のことじゃないか、っていう気もしてきます。肖像っていうのは、要するに誰かに似せた絵ですよね。なので、そう解釈すれば、決して倫理的に悪いものじゃないです。

ところで、また「中尊寺〔一〕」に戻るんですけど、この「大盗」のモデルは頼朝じゃないか、なんていう風に言われています。平泉に大きな、あまりよろしくない影響まで与えた人物ですけど、仏教を重んじたという意味では全否定もできない存在です。テーマ的にも近いですよね？ で、パワーポイントに頼朝の「肖像」の図を貼ったわけですけど、もしかしたら賢治は、そんなことまで考えていたのかもしれませんがね。もっとも最近では、この絵は源頼朝像じゃなくて足利直義像だったなどと言われてもいるんですけども…

肖像画のようなものだとしたら、あるいは義経堂や弁慶堂にある義経像のことを「**にせものの像**」と言える可能性もありますね。さっき「**よくないイメージではあるけれど、だからといって単に悪だとしてしまうだけでは割り切れないこと**」というのが文語詩「中尊寺」のテーマじゃないか、って言ったんですけど、頼朝であったにしても、義経であったにしても、「肖像」のことであったとしたら、悪そうだけれど悪くないもの、になりそうです。

しかし、この「**にせものの像**」というアイデアは下書稿の段階で捨てちゃってます。

### <「そらごと」の謎解き>

そして、残るはこの「**そらごと**」なんですけど。「そらごと」は何かというと、嘘ですよね。賢治はやっぱりね、嘘、大嫌いです。嘘や偽りは大嫌いな人です。例えば大谷良之さんという賢治の友人が書いた「**賢治君を思う**」(『宮沢賢治とその周辺』)の中に、盛岡高等農林学校の修学旅行の時のことが書かれていて、ずっと関西まで来て、その帰りに箱根越えをするんですけど、あの大学駅伝をする箱根ですね。で、昔ここに関所があったんですけど、そこを訪ねようとして「関所までどれぐらいありますか？」と農夫に聞いたら、「あと二里あるで」と返答があった。そうすると賢治が「**馬鹿野郎、嘘つくな**」と。あの温厚そうな賢治にはあり得ないような言葉で、ものすごく怒って叫んだんだという。だから「そらごとを云ふ」とか「偽リヲ云フ僧」っていうのも、賢治としては非常に怒っていた、そういうふうにも考えられるわけです。中学校時代の賢治についてよく調べられている小川達雄さんの『盛岡中学生 宮沢賢治』では、この大谷さんの思い出話を引用しておられます。

じゃあ、中尊寺のどこで、どんな「**そらごと**」を言われたのか。小川さんによれば、ちょうど賢治が行く直前に**電影**というペンネームで、「岩手日報」(「中尊寺参詣(上)」)にこんな記事があったというんです。「**此処に白旗大明神と云ふ片額の掲げてある堂がある。今しも扉を明けて在る坊さんがある**」。「余は此坊さんに乞

ふて此木造の画姿を頂かして貰った、坊主曰く、『ズット前に窃盗にヘイられヤシテ竜頭の兜と、ズエー（采配のことならん）は取られヤシテガス、其取れたのは余程是よりはジエーのでガシタと云ふ』。で、こんなようなことを賢治たちは言われたのではないかというんですけど、ただ、これ、確かに方言はきついかもしれないですけど、嘘というわけではないですよ？

じゃあ「そらごと」ってなんだろうか？ 色々考えながら、その当時の文献、今、国会図書館のデジタルアーカイブで、すごくたくさん資料を出してくれているので探してみたいです。例えば坪谷水哉という人が書いた『新山水行脚』という本には、「まず弁慶堂に着て待てば、案内者は近き辺りの管理所に往き、各自の為に参観券を求め来ると、其後は一堂ごとに異なる監守僧が、一一鍵で扉を開いて案内す」なんて書いてある。義経堂は毛越寺もうつうじの管轄で、弁慶堂の方は中尊寺の管轄なので、どちらにも義経像があるんですけど、どちらにも僧がいたみたいなんです。僧がそれぞれの堂の前で待っていて、そこに見学者が来ると案内をしたみたいです。電影が行った時に対応したのも、こういう僧で、確かに方言はちょっときつかったかもしれませんが、正規のお坊さんによる正規の案内をしたんじゃないかと思うんです。だから、嘘なんかつかないわけです。たとえば、今日、延暦寺のお坊さんに「これは何ですか？」と私が聞いたとして、そうそう嘘を教えられることって、ないと思うんですよ。

また中尊寺仏教文化研究所の所長さんである佐々木邦世さんによれば「中尊寺の『日誌』がありまして、明治45年5月29日のところに、こう記録してある。当番が宝泉院。これは62歳の澄應という人でございまして、「金2円也、盛岡中学生60名」といった記録が残っているそうです。こんなにしっかり、いろいろなものが管理されている中で、お堂の前にいる正規のお坊さんが、嘘の説明なんかをするわけがない。盛岡中学から何人来て幾ら払った、その時の担当が誰だったなんていうことが、佐々木さんが講演をされた平成22年にもさらっと引用できたりするわけですからね。しかも、そこに来ているのは盛岡中学校（現・盛岡第一高校）という名門校の生徒さんです。このあたりだったら膳所高校とか洛北高校とか、そういうところの生徒さんたちが修学旅行で来るわけですよ。そんな時、お坊さんが嘘なんかつくでしょうか？ でも、賢治は「僧が嘘をついた」なんて言うんです。それってなかなか難しいじゃないですか？ あり得ますか？

最初に、私、中学校時代に、ここに修学旅行に来たって言いましたけども、その時にお坊さんが説明してくれたりして、「あ、嘘だ」って中学生の私が指摘するような嘘。そんなのってあるのでしょうか？ でも、そう書いてあります。それ以外に受け取りようもないです。

ところで、こういうことを考えるのって面白くないですか？ え、私だけ？ 文語詩自体については、なかなか面白いと、スパッと言えないところがあるのですが、こういうこと考えてると、文語詩を読むというのは、とても楽しいことなんじゃないか、なんて思っているんですけど…

### <判官鼠員の視点から見た平泉>

で、またですね、この電影さんの文も、よく読んでみるといろんなことが書かれていて興味深いです。「扉を開いた中には即ち予が日頃お眼に掛りたいと恋に憧憬れて在た義経公の木像が在すのだ、甲冑姿の右手に采配を握られ雄姿が、今も尚歴然として遺つて在る」。この人ね、めちゃめちゃ恋い焦がれているんですよ、義経さんに。

他にも、いろいろな資料に目を通してみると、たとえば日本大学中学校校友会という大正15年3月の雑誌に出ていた「東北地方修学旅行記」には、「弁慶堂を見たが例の七つ道具を背に負ひ、いかめしい装飾をした

**弁慶の立像と失意轉軻の英雄源義経の像と並び立つを見ては主従最後の奮戦の状景が眼前に浮かんで暫し無量の感慨に打たれた」と書いてあるんですね。これ、何でしょう？**

あの、頼朝と義経、どっちが好きですか？ 頼朝？ 頼朝は、確かにすごい政治家かもしれないですけど、なんか胡散臭い。なんやかんやと言いがかりをつけては弟を騙して殺してしまう。弟ですよ？ 義経の方はというと、ちょっと政治的能力は劣るかもしれないですけど、八艘飛びをしたり、<sup>ほっそう</sup>鴨越を降りたりとか、めっちゃめっちゃかっこいいし、英雄・ヒーローじゃないですか！ やっぱり名政治家よりも名ヒーローの方がかっこいいですよ。それで、その日本大学中学校の生徒さんも「無量の感慨に打たれた」わけです。そりゃ、そうです。

室町時代から、こういう**判官鼻眞**というのはあったらしいです。頼朝は優れていたかもしれないけど、やっぱり義経だよな、みたいな。あまり良い最期ではなかったかもしれないけれども、かっこいいし、そもそも講談なんかにしたら、絶対に面白い。読んでいる方だって「頑張れよー！」って気になりますよね。だからね、みんな中尊寺に行って「わーっ」と思うのは、義経がここで滅ぼされた。そして平泉の藤原家も滅ぼされたという、その悲劇の現場を、いわば「聖地巡礼」するんです。やっつけた頼朝をなんて憎たらしいとか思いながら、みんな平泉に行くわけです。

また更にいろいろと探ってみますと、明治四十五年のこんな本も見つけました。「**彼等は蝦夷、樺太へ逃げたか、但しは満州地方へ落ちたか其処までは知らないが、文治五年以後は此の日本国に於ては見る事の出来ない人となつた。茲に於いてか紅葩は涙下らざるを得なかつた**」(玉井紅葩『山河拾四州』)。やっぱり義経鼻眞ですね。で、義経鼻眞が極まった所で、いったい日本人たちは何を考えたか？ 「**義経は死んでない。蝦夷に行ったんだ、樺太に行ったんだ！ そして大陸に行ってジンギスカンになったんだ。あれほど馬を使える人は義経しかいないじゃないか**」。まあ、普通に考えて、そんなことがあるわけないんです。けども、みんな義経鼻眞ですから、こんな馬鹿みたいな、嘘みたいな話なのですが、大ブームになったというんです。

『義経再興記』という本が**明治18(1885)年**に出ます。義経がモンゴルに行ってジンギスカンになったという説は、江戸時代に新井白石が書いたものをシーボルトが紹介し、それを政治家兼歴史家であった**末松謙澄**が英語で発表したのが原本で、それを**内田弥八**という人が和訳したものなのだそうなんです。ちょっと見にくいと思いますが、国会図書館のデジタルアーカイブを見ても明治18年から19年にこれだけ印刷を重ねて、第6版まで刊行されてます。かなり売れたんでしょうね。

また**大正13(1924)年**には、**小谷部全一郎**『成吉思汗は源義経也』という本も出て、源義経=成吉思汗説は空前のブームになったらしいです。義経がジンギスカンになったなんていう話は、皆さんもお聞きになったことがあるかもしれませんが、もし、賢治がそんなことを考えながらお坊さんの話を聞いていたとしたら面白いですよ



国立国会図書館のデジタルアーカイブより

ね。もっとも、この本に限っては盛岡中学校の修学旅行よりだいぶ後に出ているわけですけど…

もし、こういう話を中尊寺のお坊さんが言ったとしても、誰もが「それは嘘だろう」「そんなことはないだろう」と思ったんじゃないでしょうか？ でも、先生は止めなかったし、ウソを言った、とかいって非難することもなかった。平泉のお坊さんとしても、そういう話をしたからといって僧としてふさわしくない言動だとして中尊寺から叱責されたりすることもなかったと思います。「嘘」「いつわり」というものの正体はこれだったんじゃないでしょうか？

なんと言っても、わざわざここに来る人は、ほとんどみんなが判官鼻眞だったみたいですし、みんな義経頑張り、頼朝憎し、とか思っている時に、嘘だということはわかっているけれども、その嘘についてうんうんと修学旅行で来た生徒さんたちも頷いてくれて、平泉のお坊さんも、きっとよかれと思って言ったんじゃないかと、そして、こうしたウソも好意的に解釈されたんじゃないかと思うんです。

まして、今、目の前にいるのは盛岡中学校の修学旅行生です。地元・岩手県の中学生ですから、日本大学中学校の生徒より、ずっと判官鼻眞で、奥州藤原家のサイドに立って平泉を訪ねている生徒が多かったんじゃないでしょうか？

ですから「偽リヲ云フ僧」なんて書いてあると、「ウソ、イツワリを言い放つヒドイ僧だ！」なんていって賢治は批判したかったようにも思えるんですが、実はそうじゃなくて、むしろ「おお、ここでも言ってくれたか！」という共感するような感じが、賢治をはじめ、盛岡中学生に共有された瞬間を詠もうとしたんじゃないか、なんて考えるわけです。

### <宮沢賢治の文語詩を読むということ>

賢治の文語詩は、なかなか取っつきづらいと思います。読みにくいし、わからないことだらけ。せっかく読もうと思っても、わからないことが多すぎて、最後まで読み終えた人は、ほとんどいないんじゃないかと思います。しかし調べ始めてみると、本当にいろいろなことが出てきて… 私も、調べ始めた当初、まさかジンギスカンが出てくるなんて思ってもみませんでした。この広さと深さと予想のよきなさというのは、かなり楽しいですね。ですので何か機会があったら、というか機会を作っていただいて、文語詩を読んでいただければいいかなと思っています。本当に、いろんなところにお宝が眠っているのが文語詩だと思っていますので、是非是非これを読んでいただければありがたいなと思っています。

だいぶ喋ってしまいましたが、これで終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

### <質疑応答>

#### 司会者（平松光三幹事）

信時先生、大変ありがとうございました。実は私、文語詩が結構好きなんです。あの源氏史は僕あまり知らなかったの、強い関心を持ちました。ここでご質問がありましたらお受けします。

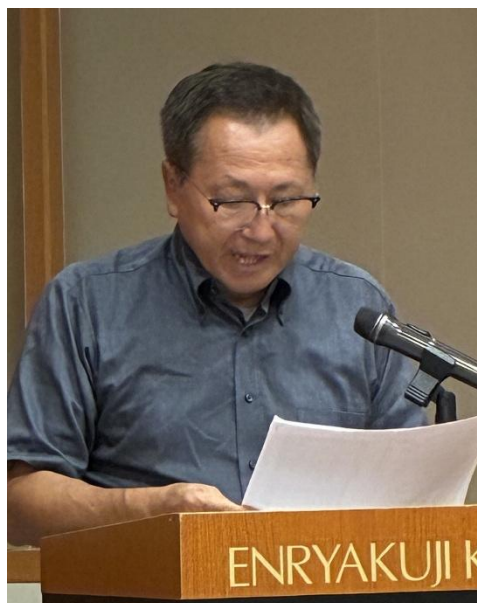
#### 質疑 1（横山照泰大僧正）

横山と申します。もう10年も前になりますが、山折哲雄先生がここでご講演して下さった(2015年9月21日)。山折先生曰く、花巻岩手の方言ですね。山折先生も岩手出身なんですよ。やはり賢治を理解してい

く上においては、方言の言い回しっていうかな、そこら辺を理解しないと、なかなか賢治の心をつかむことはできないよっておっしゃったんです。先生、そこら辺はどうなんですかね。ちょっと先生の個人的な見解になるかもしれませんが、お教えいただいたらありがたいと思います。

#### 講師

私、生まれも育ちも関東なので、今は、だいぶ関西弁も交ってきたんですけども、やはり、その土地その土地の言葉じゃなきゃわからないことがあるんじゃないかと思ってます。英語で言っても意思疎通はできるけれども、何か違う。多分、関西弁には関西弁特有の言い回しがあって、それを標準語にしたり、まして英語にしたら、通じるかもしれないけれどなんか違う、みたいことはあると思う。本当は私が岩手弁も関西弁も使えるバイリンガルだったらいいんですけども、残念ながら使えません。なので、なんとか標準語で分かるところは分かりながら突き詰めているという、まだまだ模索中、というふうなお答えになるかと思います。



司会 平松光三 幹事

#### 質疑2 (植田耕司氏)

文語詩について非常に愛着を持ったんですけども、手頃な入門書、そういう本があれば紹介していただきたい。先生は『宮沢賢治「文語詩稿 一百篇」評釈』を出されていますが、これは本屋とか図書館でも簡単に見られるものでしょうか。その点もお願いします。

#### 講師

文語詩は人気がないので新潮文庫みたいなのはないんです。筑摩文庫の『宮沢賢治全集』には全編入っています、ちょっと厚めなんですけども。

私の本も、賞をいただいて非常にありがたかったのですが、賞をいただいたけども売れないんですね。人気ないんですよ、本当に。買っていただけそうな人には、お世話になりましたということで、既に自分から差し上げてしまっているということもあって、ますます誰も買ってくれないんです。また分厚いんですよ、これが… 本屋にもなかなか置いてもらえないのですが、図書館に行ったらあるかもしれません。

今はインターネットで「五十篇」「一百篇」の原文を読むこともできますし、私の評釈もホームページで公開してますので、すぐに読めます (<https://www.konan-wu.ac.jp/~nobutoki/>)。いろんな胡散臭いことも書いてありますし、その後は大幅に改稿したりもしてるんですが、なんだろうと思ったら、まず見ていただければ、これまでにこんなこと言われていたのか、とか、こんなことが考えられる、ということは一応は分かるようにしているつもりです。そんなものを見ながら読んでいただけたら私も嬉しいです、賢治さんも喜んでくれるんじゃないかと、勝手に思っております。よろしくお願いします。

#### 質疑3 (中野新治氏)

中野と申します。大変面白く拝聴しました。信時さんがこだわっておられた「にせもの」とか「そらごと」、「嘘について」、こういうのに対して、賢治という人は非常に敏感な人だったというのが基本的に言えると思います。彼は自分が修羅なんだと言ったのも、修羅の定義がいろいろあると思いますけど、「いちめん<sup>てんごく</sup>の詔曲

模様」とか言ってこびへつらったり、嘘ついたりするということですよ。だから彼の童話なんかでも、偽物の金のメッキってのが出てきたり、にせものとか何かを盗むとか、泥棒するとかいうことも、しょっちゅう、あちこちで出てくる。間違っただけで判断するとかというのは完全にそうなんだけど、人間にとって現実というのが果たして何なのかという問題を、賢治は根本的に考えた人で、それがこういうところに出てきている。特に文語詩で生々しい庶民の生活エピソードが出てきた時に、それをあちこちで強調している作品も文語詩にあると思うんです。私、信時さんのところで本当に色々勉強させていただいたのですが、そこでやっぱり似たような表現がたくさんあったので、その辺も信時さんのお言葉でちょっとまとめていただくとありがたいです。

#### 講師

ありがとうございます。こちらこそ、いつも勉強させていただいています。賢治さんは偽物とか偽りとか、もう大嫌いだし、でも大嫌いな割には結構好きなんじゃないかなって言うふうなところがあって… 例えば、夕日が金に輝いている。これは偽物の金だけど、すごく美しい。そういう言い方をしますよね。その金は金でも、いわゆる 1g 何万円するようなゴールドではないけど、その金のようなものをまるで偽物の金だと言って、偽物というものをいい意味で、何かを表現するときに、すごく美しい、美しすぎるものに対して偽物の金だとか、そういう言い方もします。偽物は大嫌いだけど、じゃあ偽という言葉が使われたら全部 0 点かっていうと、そうでもないみたいなの… だからその偽金とか偽りとか嘘とかいうのも、嘘は嫌いなのはもちろんだけど、でも嘘っていうのは本当に全ての嘘が嘘ではなく、全てがダメなものでもないよみたいな、そんな風な究極の悪なんだけど、悪っていうのは善も含んでるよ、と。何か曖昧なんですけど、なかなか、こういうことについてピタッといい答ができるかっていうと、私もまだ模索中で、もう少し何かすっきり説明できればいいかなと思ながらの発表でした。

#### 質疑4 (佐藤洋子氏)

**佐藤です。**今日はあの文語体と口語体の、多分それが大事なお話だったと思うんですけども。方言っていうのは、その人たちの空気とかイントネーションとかで、ほぼ間違いなく生まれ育ったところがよく分かるっていう話です。私の主人の父と母は遠野あたりの生まれ育ちなので、かといってもう北海道に移りましたが、言葉は全部遠野あたりの言葉で、最初何言っているのか分からなかった。それでもなんか、心に残ります。賢治さんは花巻出身。先ほど昼食をご一緒した花巻の生まれの山根さんという方がいらっしゃいますので、彼ならそこら辺のことが分かる、見解があるんじゃないかなと思って推薦します。

**山根と言います (山根久之助氏)。**今、急に言われたもんだから動転してます。今日の話には直接関わってなくて申し訳ないんですけども、賢治の作品を色々読んでおるとね、私はその花巻出身なんだけども、忘れてることがあるんだよね。昔、そういえばこういう言い方があったなっていうのが、賢治の作品を読んでいて思い出させられる。そういうこともあって、さっき



質疑4 山根久之助氏

「なってもなくても」っていうのは何か、そういえばそういう言い方あったなと思う。「なっても」、確かに、何でも何が無くてともいうか、何が無くなってもというか、そういう感じの「なっても」。私は18歳まで岩手にいて、それから東京に出てきて、いろいろあって、今京都に住んでいます。だから賢治の作品を読むと、教えられるところもあるんだけど、なんかね、懐かしいっていう感じ。そういえばこういう言い方が、僕の子供の頃やってたとか、そういうのを聞いたとかね。思い出させられることがあって、そういう意味で読むこともあるという話です。まあ、ふるさとを忘れてしまった人間としては、賢治を読むことで、もう一回ふるさとに戻ってみるといって、そういう感じがします。

#### 講師

文語っていうのは… いわば方言的なものを削ぎ落とししまったものが文語なんですけども、じゃあそれで削ぎ落とし切っているか、って言うと、文語の発音は多分あの花巻弁の発音とかイントネーションがありながらの文語なので。なので、文語だったら全くその花巻弁的なものがなくなるかという、そんなことはなかったんじゃないかと思います。うちの子どもたちは生まれながらに関西弁ですけども、標準語で書いてある文章でも、音読してみると、めちゃめちゃ関西弁になります。なので、いくら文語であっても、やはり花巻弁というものはある。そのニュアンスは、ちょっと私には残念ながらわかりませんが、いろんな方々に参加していただきながら賢治を読むと、私などの気がついていなかったことも、どんどん指摘していただいて、ぐっと面白くなっていくんじゃないかと思います。また少しずつ教えていただければありがたいと思います。ありがとうございました。

#### 質疑5（三又雅文氏）

今回初めて参加させていただきました三又と言います。実は僕、花巻出身で、ずっと花巻で育ってきました。3年前にこっちに引っ越してきました。宮沢賢治との関係は… 祖父が宮沢賢治とちょっと関係があって、文学的要素とは全く関係ない方面から、僕は宮沢賢治をずっと見て育ってきたんです。

賢治さんの宗教心とか信仰心はお父さんとの関係、非常に信仰心の強いお父さんの影響だというふうに思っています。また、宮沢家の家業との関係、家の生業との関係で、宮沢賢治がああいう性格を持って、ああいう文学活動に進んでいったんじゃないかと、僕は個人的に思っています。皆さんすごく宮沢賢治の作品を好きで、いろんな解釈をなさっているんですけども、実は僕はここに来て、やっと宮沢賢治の作品を一つ二つ読むようになりました。家業との絡みを持って宮沢賢治の作品を見ていただくと、また別ないわゆる宮沢賢治の表現っていうのがわかってくるんじゃないかと思います。僕は文系の人間じゃないのでわからないんですが、その辺の分析とか研究とか、先生は考えたことはないでしょうか？

#### 講師

花巻出身の方は宮沢賢治を小学校時代から、とにかく刷り込まれすぎて、もう読みたくない、みたいな話も聞いたりするので、今になって読むようになった、というお話も、なんとなくわかるような気もします。家業っていうのもやっぱりあったような気はしますね。賢治が農村生活を送った時に、やっぱり町で育った者、給料をもらった者とは一緒にはなれないみたいなことを言われたようです。今だったら、農村地帯に行っても、まあまあ一緒に仲間に入ることもできる時代なんじゃないかと思いますが、当時は町で育ち、一度でも給料をもらったやつはもう違うんだ、みたいなことを言われてしまう時代です。おそらく町の中にも、それこそ農学校の先生をやっている、まあ金銭的には裕福だったかもしれないけども、ただ賢治という人は、それ以上に何かいたたまれないというか、寂しい気持ちで生きてたんじゃないか、という気がするんです。

いつも思うんですけど、宮沢家は質屋・古着屋ですから、稗貫郡一帯がどんどん凶作になったり、貧乏になればなるほど宮沢家は儲かっていく。しかし親父の家業は間違ってると言いながら、親父にいつもお金もらって賢治は遊び歩いている。そういうことがおかしいなという風に気がついていて、気がつくためには本が必要なんですけど、そういう本を買うためのお金は一体どこから来るかという、結局は貧しい人々から収奪していました、ということになるので、賢治はそういうことを生涯ずっと感じていた人なのかなと思います。

宮沢賢治は基本的には生きていくことが嬉しくてしょうがない人だったと思うんですけど、その一方で、なんか「生まれてすいません」みたいな、私が今ここにあるっていうことは、あなたたちから搾り取ったもので生きていくんですよ、といった気持ちがどこかにあるような… 賢治は、野原かなんかで太陽が出てくるとワーツと喜んでしまう人です。この喜んでしまう自分を否定することもできず、生きる喜びとして詩や童話を書いたりもするんですけど、でも、それで家に帰っておいしい食べ物なんかを並んでいたりすると、一体これはどこから来るんだと思って、またガーンと沈みこんでしまうみたいな… 賢治っていうのは、そういう風なところを行ったり来たりしながらの人生だったのかなと思うんです。ちょっとなかなか、気のきいたお答にはなりませんけども、宮沢賢治っていう人は、今の人たちよりも、ずっと強い重圧を感じながら生きていたのかなという気がしております。

#### 質疑6（司会者）

私、午前中の自啓寮の寮歌を歌わせてもらった一人です。岩手大学自啓寮で、今から40数年前、まだ若かった青年の時に過ごしました。岩手山登山をした時に、記念に手ぬぐいをもらいました。それに「**自由の剣をめて（右手）に持ち、ゆんで（左手）にかざす自治の旗**」という、後半は忘れたんですが、そういうのが書いてあって、先輩方はこれ賢治が書いたんじゃないかという風に言っていたんです。私は賢治全集とかを探したけどなくて、やっぱり違うかなと思ってはいたんです。私、文語調の歌詞に惹かれるところがあって、賢治の文語詩とかに記載あれば教えてください。

#### 講師

ちょっとそれは初耳です。ただ、先ほど見せていただいた寮歌の歌詞の「浮華軽佻の」「勤儉自治の」とかいった感じの四字熟語的なものは、宮沢賢治はあまり使わないような気がします。賢治が書いた「精神歌」の方は、こっちは新しすぎるとは思いますけども、宮沢賢治がもし岩手山について書いたとしたら、多分「日ハ君臨シ」みたいな言い方をしたのかなという気がして、今、聞いた語彙からいうとちょっと違うかなと… また機会があれば調べてみたいと思います。

「本稿は2025年9月21日（日）PM1:00、比叡山延暦寺での賢治93回忌記念講演の内容に、加筆・修正を加えたもので、2025年12月10日発行の関西岩手県人会報・イーハトーブ59号特別寄稿です」